
最凶なあの人

夜製ぼるぼる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最凶なあの人

【Nコード】
N6077K

【作者名】
夜製ぼるぼる

【あらすじ】
友達の姉ちゃんが怖いなのって

赤外線

「うわっ、今日メツチャ晴れとる。出かけよ思つとたけど日差しきつすぎるわ。こんな日に外出たら赤外線がきつ過ぎて皮膚癌になつてまうわ」

「そだな。てかなんであなた関西弁でしゃべってんの？読者様があなたのこのことに関西人やと思うで」

「うつってんじゃねーか、後関西弁だけじゃなくて赤外線も突っ込もうよ」

「？赤外線に突っ込む？なんで？」

「え！浴びすぎたらいけないのは紫外線だぞ、赤外線はストーブとかから滲み出てるやつだぞ！薩摩芋暖める時においしくしてくれるやつだぞ！」

「まじか、紫外線は人間の敵だけど赤外線は人にも芋にも優しいやつなんだな知らなかったぜ」

「お前は可哀相なやつだな。あれところで最初の発言者は何で黙ってるの？と言うか顔も赤いんですけど」

「もしかしてあいつも素で間違えてたんグフツ……」

えろり。そして、バタリ

「何か言った？」

ピクリとも動かない相方を見る。

こちらを見る般若を見る。

目を逸らす。

「いえ、まあ何も特にありません」

「ならいいのよ。その動かないモノはそうね庭にでも捨てときましようか」

有無を言わさない圧力がかかる。

だが、あいつは俺の親友。馬鹿だけど親友だココは助けるべきなんじゃ！

心を奮い立たせて言ってやるぜ。

視線を合わせる。

よし言ってやる！

「そうですね。捨てちゃいましょう」

何あの目こつち見てるときさえ人間見てくれているような目じゃなかったんですけど。

倒れてるほうに対しては最初から落ちてたゴミのともも言いたげな視線なんですけど。

本能で回避しちゃったんですけど、考えてたのと口にした言葉がまったく別物に変換されちゃったんですけど。

「はい、よろしい。」

につこりと向けられたアルカイツクスマイルに俺は赤面を通り越して青ざめたね。だって目がまったく笑ってないんだぜ。

それから俺は親友のなきがらを庭に引き摺っていき庭に出たときに再び笑顔で「アイス買って来い」との命令に二つ返事で了承しコンビニまでマジダツシュ。好物である小豆バー購入（自費）そして再びのダツシュ、パシリ根性が滲み出ますが仕方ありません。だってあの橘桃代さんに敵う筈がないのだ。

あの無敵超人に敵うわけないんだ幼い頃からあの人には頭がまったく上がらない俺も、俺の親友でありあの人の子でもある橘颯太も。

「桃代姉さん。アイス買ってきたよいつも通り小豆バーで大丈夫だよね」

「あれ、和樹どこ言ってたの？」

「お前が倒れてた間に少しパシリをな……」
気の毒そうにこちらを見てくる。

何だその哀れみの目は！正直、ボディに一発食らって倒されたお前よりもむしろと思う。105円であの攻撃を避けられるならいくらでも払うね俺は。

ピタッ

「ひゃっ。何、何なの？」

「ハイ麦茶。外暑かったでしょ、ご苦労様」

「いや買いに行かせたの……」

ギロリ

「いえ、なんでもありません。」

黙る颯太こいつかなり調教が進んでやがるな。

俺も人の事言えないが、だって冷やした麦茶を用意してもらって

いるだけでうれしさを感じてしまっているんだから。正直勝てるきがしないねこの人には。

あの笑顔忘れられなくて（前書き）

投稿遅くなりました。

友達が生体肝移植するやらで4月はゴタゴタ取りました。

下手糞なりに頑張るのでよろしく願います。

あの笑顔忘れられなくて

そもそも、なんで俺たちがこんなに調教されてしまっているかと言つとそれは俺たちの幼少時代に遡るはめになる。そうあの日もこんな茹だる様な暑い夏の日だった。

じりじりと照りつける真夏の太陽とこれが最後よと鳴き続ける蝉の声に当時5歳の俺は浮かれていたんだ、気分はまさに俺の夏状態ですよ。そんな感じで今日も朝から昆虫採取に出かけようとしていた。母親に公園に言つてくるとつげ家を出ると家の前に大きなトラックが止まっていた。

そのトラックを馬鹿面でボーッと眺めていると知らないおじさんとおばさんがこちらを見ているのに気がついた。こっちが気づいたのに気づいておばさんが話しかけてきた。

「こんにちは」

につこりと笑顔で挨拶してくる。見た感じうちの母ちゃんと同じ年くらいに見えるのでその時俺はその人をおばさんと呼ぶことにした。

「こんちわ、おばさんたち誰？何してんの？」

「今日から此处に引越してきたのよ。よろしくね」

「よろしく。俺、おばさんたちの家の前の家に住んでる石条和樹つてのおばさん達は？」

「そっかお向かいさん家の子ね、私は橋梢って言つたのよ。そうだ、

和樹くんは今いくつなの？」

「俺ね、今年で四歳」

指をパツと四本たたせて見せる。

その時おばさんは良しとばかりに頷いてから

「そっか、家にもね和樹くんと同年の子がいるのよ良かったら遊んであげてくれないかしら？」

「いいよ！でもどこいんの？」

「ちよつと待ってね」と言い残すと俺に背を向けてパツと玄関の方まで駆けて行った。少しすると家の中から二人の子供を連れておばさんが戻ってくる。

「はい、じゃあ紹介するはね右の子が颯太で左の子が桃代って言うの仲良くしてあげてね。」

「うん！俺、石条和樹四歳よろしく！」

「ホラそうちゃん、もちちゃん挨拶して。」

おばさんから促されて右側の颯太と呼ばれていた方が口を開いた。

「僕、橘颯太って言うのよろしくね。僕も和樹くんと同年で四歳なんだ」

颯太の方はそう言って人懐こそうな笑顔を浮かべた。身長は僕と同じくらいか少し颯太のほうが小さいくらいだ。

「私は颯太のお姉ちゃんの桃代って言うのよ、よろしくね」

桃代の方も同じような笑顔だったがこちらの方が幾分男のこらし

さがあった。言うなら颯太がニッコリで桃代の方がニカッてな具合だ。

「じゃあ、そうちゃんとももちゃんは引越しの片付けのお手伝いはいいから遊んでらっしゃい。」

「はい」

元気よく返事して歩き出そうとする、俺もそれについて行くことと歩き出そうするとおばさんに呼び止められた。

「そうだと樹くん今度から私のことはおばさんじゃなくて梢さんて呼んでね」

「え、でもうちの母ちゃんと同じ年だからおばさん……」
と言いながら振り返るとニッコリと笑っていたおばさんと目が合った

「おばさんじゃなくて梢さんでしょ」

びくつと何か恐怖を感じとって

「はい。梢さん」

そう呼ぶとそれまでのなんともいえない恐怖感がきえて、打って変わって優しそうな本来の笑顔のあり方と言うのが正しいのかそんな感じのものが呼び出された感じになった。

うわー、今思い出してみると桃代姉さんのあの時の笑顔って梢さんそっくりじゃん。さすが親子だよ大迫力だよどちらも有無を言わせないプレッシャー凄過ぎですよ。五歳児に無言の圧力で言い聞かせるなんて半端ないな梢さん。と今はそんなことじゃなくて話を元に戻すと。

「はい、良く出来ました。じゃあ三人とも気をつけて遊んでらっしゃいね。いってらっしゃい」

「「「いつてきまゝす」「」」

そう言つて三人で歩き出した。すると桃代がこう切り出してきた。
「和樹は颯太と同じ年なんだよね」

「うん、そうだよ」

「じゃあ、私が一番上のお姉ちゃんだから和樹は私のことを颯太と同じようにお姉ちゃんと呼ぶのよいいわかった？」

「わかった。でもお姉ちゃんって恥ずかしいから桃姉ちゃんでもいい？」

「うん、じゃあ和樹はそれでいいわよ」

「よし」と桃代が頷いていると今度は颯太が話しかけてきた。

「ところで和樹今日はなにをするの？」

「俺は今日公園に虫取りに行くはずだったんだけど颯太たちは何がしたい？」

「僕も虫取りでいいよ」

「私もそれでいいよ、じゃあ出発だー」

そう言つと桃代が先頭で走り出した。すると颯太が大きな声で桃代を呼び止めた。

「待つてよ、お姉ちゃん」

「何よ、颯太男の子なんだからこれくらいの速さ着いてきなさい」

「違うよ！お姉ちゃんココの公園の場所知らないでしょ！」

「あつ……」

元氣よく駆けていった桃代がピタツと立ち止まって顔が見る見る間に赤くなっていく。

そりゃあんだけ元氣よく走り出しといて場所知らないとか恥ずかしくて仕方ないだろう。しかもそれを弟に突っ込まれるってどんだけですか。

「はははっ、お姉ちゃんのドジ」

「どーじ、どーじ」

二人で爆笑しながらからかっていると言顔を赤くした桃代が肩を震わせながらこちらに歩いてきた、それを見た颯太はハッと表情をこわばらせると見る見るうちに顔が青ざめていく。そんな颯太を見ながら俺はまだ笑い続けていた。俺ら二人の正面に桃代が立ち止まると

「二人とも正座しなさい……」

それを聞いた颯太は即座に正座した。そんな二人を見ながら俺はまだ笑っていた。

「二人と言ったのよ和樹あなたも正座するのっ!」

言うが早いか俺の手を掴んで腕を少し捻ったかと思うと掴まれた腕を支点にして俺は宙を飛んでいた。そして一回転して足から着地。そして呆然としている間に膝カックン。両膝を地面に着けた所で肩をグッと押さえると……。強制正座の出来上がり! 一切の抵抗も許す暇ない一連の流れ作業はまさに圧巻。

「ふう、二人とも正座したわね」

「……何が今あったの?なんで座ってんの?てか、さっき宙浮いてなかった?」

「夏のアスファルトってアツツ、しかもゴツゴツして痛いつ!」

俺と颯太の前で仁王立ちしながら桃代が腰に手を当てて説教した

した。

「余計なお喋りしない！……いい、二人とも女の子には優しくしなさい……。……女の子は男の子よりも弱いんだから丁寧に扱いなさい。……良い分かったの？わかったら返事！」

永遠と5分近く真夏のアスファルトの上で正座アノド説教くらって意識が朦朧と仕掛けていたところでやっと説教地獄から開放される。

「はい！」

「反省したわね、なら立ち上がってよし。今度からは気をつけなさい」

お説教が終わって何気なく皆でまた公園に向かおうとしていた所で俺はふと思い出した。そう言えば正座させられるとき空浮かなかったけ？

「ねえ？さっき俺空飛ばなかった？飛んでたよね！てか、桃姉ちゃんが無かったんだよね？」

あの笑顔忘れられなくて（後書き）

なにぶん素人なものでいまいち話の止めどころがわかりません。
コツ等がありましたら教えてください

ヒーローガキ大将（前書き）

なんかはなしの方向性でか辻褄が可笑しい気がします。
どこが駄目か指摘していただけるとうれしいです。
生体肝移植の友達無事退院しました

ヒーローガキ大将

「！」「」

そう俺は飛んだんだ、捻られてから飛んだんじゃなくて飛んでから捻られたんだ。

「手を掴まれてからふあつてなった。そしたら手を捻られて一回転しちゃったんだ！何で？」

二人が不味いといった感じに顔が歪んだ。

「気のせいじゃない」

「そうだよ。気のせいだよ」

「そんなことないよ。絶対飛んだよ！ねえ、何がどうなったの？」

何度目かの押し問答の末に仕方なさに桃代が話し始めた。

なんでも桃代の話によるとどういう原理なのかわからないが感情が昂ぶった時に物を持っていたりすると何かの能力で持っているものの重さを消してしまう事が出来てしまうらしい。それがさっき俺を浮かせた力で別に怪力とかではないらしい、桃代の意識としては持っている物の重さがふつと消えてしまうらしい。そしてそれが桃代達家族をこの町に引越させた原因でもあるのだ。

さっきから「らしい」ばかり繰り返しているが全てにおいてハッキリしている事が無く曖昧なので仕方ない。因みに今だにちゃんと調べていないから「らしい」が取れることは無い。まあ、そんな事はおいて置いて話を過去に戻すと。

その日桃代と颯太は二人で公園で遊んでいたのだが、そこに桃代と同じ年の男の子3人が公園に入ってきて遊び場の取り合いになっ

た。男勝りだった桃代と相手のリーダー格の男の子が取っ組み合いになり、その時に突然能力が発動され相手の男の子がポーンと吹き飛び運悪く腕を骨折させてしまった。そして相手の親御さんが出てきたり、その光景を見ていた子供たちには怖がられたり、あること無いこと噂が広がりして居辛くなったのでこの町に引っ越してきた。

と言うのがココにいたる経緯なわけがこの能力が今俺に露見してしまったため、また不味いことになったと言うわけでまた居られなくなるかも知れないのでドキドキなわけで二人の顔は緊張で強張っている訳で。

しかし、いかんせん子供の頃の俺といえば言わずと知れず馬鹿だったのだご近所さんにも「石条さん家の子はいつも元気がいいわネエ」といわれるすこぶる評判の良い子だ。だから普通なら怖がつて腰が引けてしまうような経験に近いものをしたのにもかかわらず

「すっ、すっ、スゲー。神カッケー！」

と子供の頃の馬鹿な俺にかかれればこの程度だ！今思えばココが引き時だったのかもしれないそうすれば桃代に扱き使われない人生が待っていたはずだ、今更思い返しても遅いのだが。そんな将来の俺の後悔など知る由もなくはしゃぎ回る子供の頃の俺。まあ、後にするから後悔なんですけどね。

「どうやったらそんなこと出来るの？てか、もっかい飛びたい」
はしゃいでる俺を二人はじつと見ている。

「和樹は私の力怖くないの？」

少し不安そうに桃代が尋ねてきた。

馬鹿面を曝しながら「なんで？スゲーカッケーじゃん！」と答える俺。

「だって私は前の所で男の子に怪我させちゃったし……」

「皆怖がって遊んでくれなくなったもんね」

「怪我なんて一人で遊んでたってするじゃん」

今考えるとそういう問題か？　つてくらいの的を射てない発言だが、

これで桃代の気持ちは少しすっきりしたらしく。

「そっか。凄いか私は……」

「そうだよ。凄いや、ヒーローみたいだ」

「そうか凄いか私はヒーローみたいか！　良しじゃあ今日から私がリーダーな年も一番上だし」

このやり取りで桃代は調子に乗った。過去のことにはしていても所詮子供煽てられてすぐに調子を取り戻した。

「じゃあ、遊びに行くぞ！」

「「おう！」」

この衝撃的な出会いから、好奇心旺盛で馬鹿な子供の俺、奇妙な能力を持つ姉桃代とその弟颯太との関係は続いていき今に到るわけだ。

現在に至るまでの経緯としてリーダーの座を奪おうと桃代に挑むこと数回しかしどれも惨敗に終わる、というのをここに書いておきたい。けしてやられるがままに来たわけではない。抵抗の歴史もあったのだ。その代表として空手を始めたりもした、だが俺が始めたことにより二人も始めたので差が縮まることはなくむしろ少し開きさえしたきができる。それが桃代の地位を確固たるものにしてしまった気さえする。だがおかげで子供ならではの公園などでの場所とりの喧嘩なども負け知らずでやってきた。桃代はまさにガキ大将という名をほしいままにしてきた。そしてその子分1、2としてそれなりに俺たちの名もこの町では有名人になっていった。

斬っても切れない縁でわけではなかったはずだ。自分が喰い付か

なければすぐに切れていた希薄なものだっただけだ。しかし、俺は喰らいつき友達になれとせがんだ、今になって思えば他にも引き返すチャンスはいくつか存在していた。だがその度に俺は離れることを拒みそばに続けたこいつ等といれば人生が楽しめると踏んで遊び続けた。決して後悔はしていない！と胸は晴れないが。楽しくなるといふ予感は的中した。今じゃすっかり調教済みな感じになっってしまったているけどね。

ヒーローガキ大将（後書き）

相変わらず下手ですみません。

ココまで読んでいただきマジ感謝です。

赤い疑惑

長々と過去話をしてしまいましたが。あの出会いからもう十年が経ちまして、俺たちは無事高校生になりました。ベリーショートぐらいたった髪型が中学に入ったあたりからロングになり、高校生2年生になった桃代姉さんはスタイルもなんといいかすっかり女らしく（胸はそんないけど）なり校内でもトップレベルの美人さんとして名を馳せてらっしゃる。弟の颯太は中2あたりで成長期に入り高校1年の今では190cm近い大男へと変身を立派に遂げやがった。

かく言う俺はというと成長期が少し遅れ気味で158cmで今のところストッパ気味である。まあこれから伸びるけどね！ぐんと伸びるけどね！別に強がりなんていつてないんだからね！……失礼ちよっと取り乱しちゃった！最近この二人と並んできるとよく弟に間違われることがるけど俺はくじけない。

そのすっかり美人に成長してしまった桃代姉さんなんですけど今のところ彼氏は出来ずじまいである。理由は大方察しがつくだろうが小学校学区内が一緒だった人間（男子に限って）は恐怖が身に沁みているというのがしつくりとくる。中学ではガキ大将はなりを潜めた為少し遠い地域から来た人間は何人が告白してきたらしいがすべてKO、その中に少したちの悪いやつが居てその後もしつこく付きまとわれついに切れた桃代姉さんが実力をもってこれをTKO、さらにこれに逆恨みをして仲間を集めて桃代姉さんを襲撃この時は俺たちも居たから良く覚えてるが例の能力を行使してバイクを片腕で持ち上げ投げつけようとするという荒業をやったのけ相手を恐怖のどん底に突き落とした。

ちなみに俺らは何をしていたかと言うと必死で投げるのを止めて

いました。

そんなこんなでやつと冒頭に戻りまして、美人なんですが彼氏のいない桃代姉さんの夏休みの遊び相手とたびたび召集されているというわけです。

「麦茶で一腹もしたし、そろそろどう致しましょうか？てか、そもそも何するために呼んだのさ」

「この前水着買ったから見せてあげようと思ってね。海かプールいければって」

「ぶつ、そんな乏しい胸見て誰が喜ぶと」

「颯太お前なっ！聞こえるぞ！」

「大丈夫よ。ばつちり聞こえてるから」
ゾクツと寒気が背中を駆け抜ける

「じゃあ、そんな腐った目はいらないわね」
「ねっ姉ちゃん嘘だよ冗だっ、ぎいやあああああああ」

二匹の白魚が巣穴に変えるかのような自然な動作で美しい指先が眼球に突き立てられた！ひひひひひひ怖っ！

目を真っ赤に充血させながら床を転げ回る弟を見下ろし一通り悶えているのを確認した後、こちらに振り返り「和樹は私の水着姿を目に焼き付けたいわよね」と確認を取ってくる

「もちろんさっ！今日は桃代姉さんの水着を余すところなく愛でたいね」

「うんっ。そうかそうか和樹は素直でいいわね、じゃあ暑いけど出かけましょうか」

「了解」

いつの間にか颯太復活してるし、あいつ最近着々と打たれずよくなってきたんな。いや、そんなことなかったわ充血して涙がとまるところを知らずあふれ出してる。

そんなこんなでやって来ました！プールさあここで楽しみの水着time今日の桃代姉さんの水着は膝下くらいまであるパレオを巻いた黒のビキニタイプ。パレオのストラップスから見える足がたまりませんね、はい。

胸がいつもより膨らんで見えるのはみてみないふり、女のプライドだそうですから昔指摘してプールに沈められたのは今もいい思い出^{トリスノミ}

「水辺に着いたんだからまずはあれでしょ」

「あれね」

「せーの、」「海だー！」「」

「ちがう！」「間違えた！」「のりで」

「じゃあもう一度」

「「プールだー！」「」
ばしゃーん！！！」

「超気持ちe」

「生き返るわ」

「そっぴゃプールとか何年ぶりだろうね？」

「去年も来たからしかも何回も。お前色々大丈夫か颯太」

「そうよ。それに、颯太目が赤いわよ。カルキがもうしみたの？」

「いや、目が赤いの姉ちゃんのせいだから！さっきのまだ治ってな

いだけだから！」

恐ろしいな。俺なんかさっきの悲鳴が耳にこびりついてはなれな
いつてのにやった本人は即効で忘れてるとか。まあ、颯太だし心配
することもないか、基本が丈夫だし。

「じゃあ少し泳ぎましょ、せっかく来たんだから。流れるプールの
流れに逆らってやるという意気込みで泳ぎましょう」

「いいねえ」

「じゃ、しばし自由行動！散開」

夏のプールはいいもんですね。辺りには裸同然の女性が水に濡れ
てるんですよ、女性が濡れてるんです。大事なことから2回言い
ました。思春期の桃色の思考はこれくらいにして取り敢えずこれか
らどうしようかな一通り泳いで疲れたから少し休憩でも使用かな。
ちようどすぐ近くのベンチが空いてるしあそこで休憩でもしますか。

「ふう、あっちい」

「和樹はもう休憩？」

声がしたほうに目をやると桃代姉さんがベンチの隣に腰をかけよ
うとするとところだった

「桃代姉さんは？」

「私も少し休憩しようと思ってたところにちようど和樹がベンチに
座ったのが見えたから」

そう言つて俺の隣に腰掛ける。水に濡れた桃代姉さんの黒く長
い髪が体に張り付いていてなんとも言えない色気を醸し出して
少しドキリとしてしまった。

「疲れたのでジュース買ってきてくれる？」

「……えっ？」

「だからジュースを買ってきてくれるかしら？」

「えっ、ああ。いいよ、買ってくる。何がいいの？」

不覚にも見とれていたらしい。長年一緒にいるんだからいまさら意識も何もないもんだと思うけど？今日は俺疲れてるのかな。

「オレンジお願ひしたいんだけど。ってなんかまたボーっとしてない、そんなに疲れた？やっぱり私行こうか」

「いや大丈夫だよ。オレンジでいいんだよね行ってくる」

そう言っつてその場を少し急ぎ足で離れていった。何だっただんころ、桃代姉さんにいまさら異性とか意識しないと思うんだけどな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6077k/>

最凶なあの人

2011年10月6日15時05分発行